

後輩たちへのエール！ その46

2021年6月23日

関高校はロイター板

◇今回は、塚原琴美さん（同志社女子大学日本語日本文学科在籍）をお送りします！

関高生のみなさん、はじめまして、こんにちは。2018年度卒業生、現在同志社女子大学日本語日本文学科4回生の塚原琴美と申します。

今回はこの「卒業生からのメッセージコーナー」に参加させて頂けたこと、とても嬉しく思っています。先生から「等身大のあなたを」とのお言葉を頂きましたので、あまり気を張らず、今までの学生生活を振り返って感じた「経験の大切さ」についてお話しできればいいなと思います

まず、私の高校時代の話から。私は高校時代、演劇部に所属していました。2年生の時は夏の大会の為に創作脚本を書き、演出を担当しました。脚本の修正や演出のプラン作りに徹夜をし、時には同期と泣きながら大喧嘩をし、先生にも叱咤激励される毎日でした。つらいことや苦しい事もありましたが、それらも含めて私は演劇部での活動が楽しくてたまりませんでした。その後も3年生の文化祭終わりまで多くの劇作に没頭し、個性豊かな仲間たちと共に熱くなった日々は今でも私の大切な思い出ですし、関高生活の基盤になった経験になりました。



演劇部の活動以外でも、私は関高校での生活が大好きでした。質の高い日々の授業、定期的に行われる講演、SGHの取り組み、生徒主体の文化祭、ほぼぶっつけ本番の体育祭、学校帰りのドラドラドラちゃん……。

変な人たち（良い意味で）がいっぱいいて、毎日飽きることがありませんでしたし、個性豊かな先生方のことも大好きで、ひたすらに憧れ、高校の先生になりたいと思った時期もありました。私にとって関高校は、色とりどりの「経験」を与えてくれる学校でした。

私の周りにも、色んな経験をしている人がいっぱいいます。中学とは違う部活に入った人、応援団に入った人、生徒会に入った人、ボランティアに行った人、イギリスやベトナムへ海外研修に行った人、資格や賞に挑戦した人……

私もやれば良かったなと後悔したものもいくつかあります。この文章を書く前、他の同期や先輩方のメッセージも拝見しましたが、関高時代の体験が進路のきっかけになった方も多くおられるようでした。

だから私は、現役のみなさんに、関高で是非いろんな「経験」に触れてほしいなと思っています。

このコロナ禍で課外活動が制限され、なかなか昔の様にはいかないと思うのですが、きっとこんな時でも関高校は出来るだけ色んな経験を提供してくれているのだと思います。どうか出来る範囲でその経験に手を伸ばしてみてください。小さな経験の積み重ねが、将来のあなたを構成していきます。



そして時に「マイナスの経験」も力になります。

ここからは私の大学生活の話になります。

私の大学生活は「マイナスの経験」からのスタートでした。本当は同志社大学文学部を志望していたのですが、不合格になってしまったのです。

不合格になった日のことはよく覚えています。ネットで合否判定を見た私は、画面に表示されている「不合格 合格最低点まで3点」という文字にぐわんぐわんと頭が揺れました。そして母に一言、「落ちた」とだけ言いました。あと3点、でもその3点の中に何百人という学生がいるんです。

これは単に私の努力不足に過ぎません。私は大きな無力感、両親に対する申し訳なさ、自己嫌悪に陥りました。大学に入学してからも意味のない言い訳を繰り返し、日々の生活にも身が入りませんでした。最初のうちは大学での人間関係が上手く作れず、ああ、関高に戻りたいと、泣きながら高校時代の友人に吐露したこともありました。

そんな負の感情の中にいた時、私はある言葉を思い出しました。

2014年に放送された、NHK 連続テレビ小説「花子とアン」で主人公村岡花子が女学校を卒業する際に、恩師であるブラックバーン先生が彼女たちに送った祝辞の言葉と、ドラマ内で花が訳した日本語訳です。

「My girls ! Grow old along with me, the best is yet to be.
If some decade later, You look back on your time with us here
And you feel that these were the happiest days of your life,
Then I must say your education will have been a failure.

Life must improve as it takes its course.

Your youth you spend in preparation
because the best things are never in the past, but in the future.

I hope that you pursue life,
and hold onto your hope and your dream
until the very end of the journey.

私の愛する生徒たちよ！我とともに老いよ、最上のものは なお後に来たる。

今から何十年後かに あなた方がこの学校生活を思い出して
あの時代が一番幸せだった、楽しかったと 心の底から感じるのなら、
私はこの学校の教育が失敗だったと言わなければなりません。

人生は進歩です。

若い時代は準備の時であり、

最上のものは過去にあるのではなく将来にあります。

旅路の最後まで希望と理想を持ち続け、進んで行くものでありますように。」

「最上のものは後にくる」。失敗の経験もまた自分の一部。

いつまでもクヨクヨしていたら関高にも申し訳ないと思いました。そこで私は一回生の中頃から元気を取り戻し、関高時代の自分に負けないように、とにかくいっぱい経験を積もうと思いました。

京都・大阪の芝居や文化遺産を片っ端から見て回り、同志社小劇場という演劇サークルに入団。同志社小劇場は同志社大学・同志社女子大学・他大学からなるインカレサークルで、

創設100周年を迎えた歴史あるサークルです。大学演劇は高校演劇とは全然違った魅力があり、市内の店に宣伝に行ったり、チラシを1からデザインし発注したり、終電ギリギリまで大学で作業したりと、大学生ならではの楽しさがありました。

現役生として最後の舞台となる引退公演では演出として参加しました。コロナ禍の影響で、人数制限アリの小規模なものとなってしまいましたが、同期や後輩と協力しながら最大限力を出し切って終わることが出来ました。



また今では、同志社女子大学は素晴らしい学校だと胸を張って言えます。

気の合う友人も出来ましたし、高校時代とはまた違った交流がいっぱいできました。京都御所の真正面にある今出川キャンパスでは常に歴史の息吹を感じながら学びを深めることが出来ますし、普段の遊び場も京都市内ですので、常に博物館・歴史資料館の中にいるようなものです。毎日が課外研修みたいで毎日飽きることがありません。また大学での授業、特に国文系の授業は質が高く、百人一首・源氏物語研究の第一人者吉海直人先生をはじめ、個性豊かな先生方の授業を拝聴することが出来ます。最近新設された日本文学科日本文化コースでは、絵巻を研究されている先生や、小津安二郎を中心とした日本映画研究をされている先生に指導していただきながら“文学”の枠を超えた学びをすることも可能です。(私は現在日本映画研究の宮本先生のゼミに所属しております)。

ですからもし同志社女子大学に入学を考えている方がいらっしゃったら、是非サポートさせていただきたいと思っています。同女で後悔したことはあれから一度もありませんし、同女の友人と出会っていなければ今の私はいませんでした。

少し脱線してしまいましたが、このように、失敗経験やつらい経験も必ずプラスになる日

が来ると私は思います。

「第一志望の大学に入る」「テストでいい成績をとる」こう言った成功体験はもちろん素晴らしいものです。思い描いた進路へと進んだ同期も、その経験を生かして日本中で活躍しています。

ですが、もしあなたが今後何かで失敗したり、思い通りにいかない時があっても、自分を責める必要はまったくありません。

前を向いてコツコツ進んでいけば、これで良かったのだと思える瞬間が必ず来ます。プラスであれマイナスであれ、学生時代に積み重ねた経験は、今後のあなたの人生の手助けになってくれます。

学生時代はロイター板です。

ロイター板ってなんぞや？

跳び箱の前においてあるバネの入った板、あれのことです。繰り返しますが、関高校は「経験」の学校です。そしてその経験はロイター板のバネの深さです。いっぱい踏み込んで、思いっきりあなたの目指す未来へとジャンプしてみてください。

私もあなたに負けないように頑張ります。最上のものは過去にあるのではなく将来にあるからです。



2018年度卒業 同志社女子大学 塚原琴美